

American Teen アメリカン・ティーン

2008(平成20)年9月2日鑑賞〈東映試写室〉

★★★



監督＝ナネット・バースタイン／出演＝ハンナ・ベイリー／コーリン・クレメンズ／ジェイク・トゥッシー／メーガン・クリズマティック／ミッチ・ラインハルト（パラマウント ピクチャーズ ジャパン配給／2008年アメリカ映画／101分）

……フィクションよりもドラマティック、ドキュメンタリーよりもリアル。それが5人のアメリカン・ティーンの生態に迫ったこの映画の売り！ たしかに、それには大成功だが、少し成功者に偏りすぎたのでは……？ つまり、「ヒエラルキーの囚」の敗者も1人は入れてほしかった……。また私としてはこの映画を契機として、17歳の若者たちのコミュニケーション能力と家族との対話の実態について、しっかり日米比較をしたいが……。

最優秀監督賞は、1970年生まれの女性監督に！

『アメリカン・ティーン』は『くたばれ！ ハリウッド』（02年）に続く、1970年生まれの女性監督ナネット・バースタイン監督のドキュメンタリー映画。そして、サンダンス映画祭で、彼女が最優秀監督賞（ドキュメンタリー部門）を受賞した映画。アメリカ中西部のインディアナ州の地方都市ワルシャワにたった1つだけあるハイスクールに通う17歳の5人の男女を、10カ月間、1000時間も撮影したフィルムには一体何が刻まれているの？ それは、きっとアメリカのティーンたちのホントの姿。すなわち、リアルさのほず。

サンダンス映画祭は、俳優・映画監督のロバート・レッドフォードが1978年に自分の生まれ故郷であるユタ州のスキーリゾート地で有名なパークシティでインディペンデント映画を対象として始めた映画祭だが、このサンダンス映画祭でこの映画が絶賛を浴びたのは、きっとそのリアルさが原因。さて、この映画に登場する5人の17歳の男女が見せるリアルさとは……？

「ヒエラルキーの図」にビックリ！

アメリカは民主主義の国、そして自由競争の国。誰もがそう思っているはずだが、映画の冒頭ビックリさせられるのは、17歳のアメリカン・ティーンは全然そう理解しておらず、アメリカの学校社会はインドのカースト制と同じような、れっきとした生徒間の階層構造が「ヒエラルキーの図」として存在していること。

ちなみに、プレスシートにあるヒエラルキーの図によれば、三角形の最上層に位置する第1順位はJock（スポーツマン）とQueen Bee（学園女王）、第2順位はSidekicks（クイーン・ビーの仲間）、Pleaser（取り巻き）、Wannabe（ファン）、第3順位はMessenger（パシリ）、Preps（文科系）、Slacker（怠け者、バカ）で、ここまでがいわば支配者層。その下にある第4順位はGeek（オタク）、Goth（サブカルチャー）、Brain（ガリ勉）、Others（その他）だが、これとその下の第5順位のTarget（被虐者）は「敗者」と位置づけられ、さらにその下の最下層にはBad boys & girls（不良少年&少女）、The Floater（不思議少女）という階層側が存在している。

そうすると、①高校のバスケットボール・チーム、ワルシャワ・タイガースのスター選手であるコーリン、②同じくバスケットボール・チームのレギュラー選手で学校屈指のイケメンのミッチ、そして③地元で著名な外科医の娘で学生自治体の副議長であり、美少女軍団を率いる学校の“女王様”であるメーガンは、最上層に入っていることは明らか。

これに対して、音楽、映画、写真、美術などアート全般を趣味としている「はみ出し者」の女の子ハンナは第2～第3順位だし、マーチングバンド部所属のオタクで、社会性なし、友人なし、フィギュア集めの趣味というジェイクは、「オタク」として敗者の仲間……？

フィクションよりもドラマティック！ ドキュメンタリーよりもリアル！

この映画の売りは、「フィクションよりもドラマティック！ ドキュメンタリーよりもリアル！」というもの。5人の主人公たちの問題意識の中心は、当然ながら大学受験を中心とした進路決定＝自分探し。しかし、そこには友情と恋愛、家族との衝突、嫉妬や挫折など17歳という年齢特有のさまざまな悩みが渦巻いている。

ナネット・バースタイン監督はそれを、ある時はすぐ近くから、ある時は遠くから

カメラに収め、彼らのナマの声や表情をうまくまとめている。したがって、たしかにフィクションよりもドラマティック！ ドキュメンタリーよりもリアル！ という売りは成功している。しかしそれは、逆に言えば、つくりもののドラマとして強調したテーマがないことを意味するから、「ふーん、なるほどナア」という感想で終わってしまう弱点にもなっている。ちなみに、私が9月1日に観た『コドモのコドモ』（08年）は、11歳の小5の女の子が妊娠し、現実には赤ちゃんを産んでしまうという物語だが、これは完全なつくりものの話の面白さを極めたもので、この映画の対極にあるものだ。

また、映画のラストでは、ハイスクールを卒業した後の5人の現状が紹介されているが、それはみんな前向きで成功している姿ばかり、しかし、ホントは誰か1人くらいヘンになっていなければ、ホントのリアルさに欠けるのでは……？

17歳、坂和流日米比較の視点 その1

5人の17歳の主人公たちがどんな生き方をしたうえで卒業式を迎えるのか、そしてその後どんな人生をスタートさせるのかは、あなた自身の目でしっかり確認してもらいたいが、ここで私なりの日米比較の視点を2つだけ指摘しておきたい。その第1は、コミュニケーション能力の比較。

私が思うに、今ドキの日本の若者を含む高校生最大の欠点はコミュニケーション能力の不足。これは、容易に自分の本音を語らない、熱い思いをぶつけないという傾向とイコール。昨今頻発している、キレた若者たちによる無差別大量殺人事件の原因の多くはこれによるものだ。それに対して、アメリカの高校生たちは……？

ジェイクはオタクとして紹介されているが、女の子に対する彼の積極的なアプローチを観ていると、日本のホンモノのオタクとは全然レベルが違うよう。もともと多民族国家であるアメリカでは、言葉にしてしゃべらないとコミュニケーションが図れないから、日本のように「俺の目を見る、何にも言うな」という文化は存在しない。したがって、言葉によるコミュニケーションに優れているのは当然だが、この映画を観ていると、あらためてそれを実感。

17歳、坂和流日米比較の視点 その2

戦後のヘンな教育によって、ヘンな個人主義が蔓延した日本では、子供は小さい時

から個室が与えられたし、いい中学、いい高校、いい大学を目指すには塾通いが不可欠。他方、オヤジは仕事に忙しいから、子供と顔を合わすのはホンの少し。そんなパターンが多いはず。したがって、高校生の子供と父親・母親との日常的な会話が少ないのは当然だし、肝心なことについて高校生が両親に相談するという習慣もほとんどないはず。

そこで日米比較の視点の第2として指摘したいのは、親子の対話の比較。この映画を観て意外だったのは、子供と父親・母親との対話が頻繁に行われていることだ。もちろん、ハンナの例のように、卒業後の生き方について子供と両親の意見が対立することはあるが、それでも徹底した話し合いが行われた末、最終的に子供の意見が尊重されているのは立派。さすが民主主義の国と感心させられる。

ちなみにプレスシートには、05年のギャラップ青年世論調査によると、「ティーン
の73%は、当然、親に信頼されていると答えた。21%は、親はもっと自分を信頼すべきだと答えた」と紹介されている。これは、日本の現状と比べれば夢みたいな数字。去る9月1日の福田康夫総理大臣による突然の辞任発表により、安倍、福田と2年の間に2代続けて政権を投げ出してしまうこの国では、国民と政治家との間の信頼はとうの昔に失われてしまっている。それと同じように、親と子の信頼が失われ親子の対話も失われた、わがニッポン国の行方は……？

2008(平成20)年9月3日記